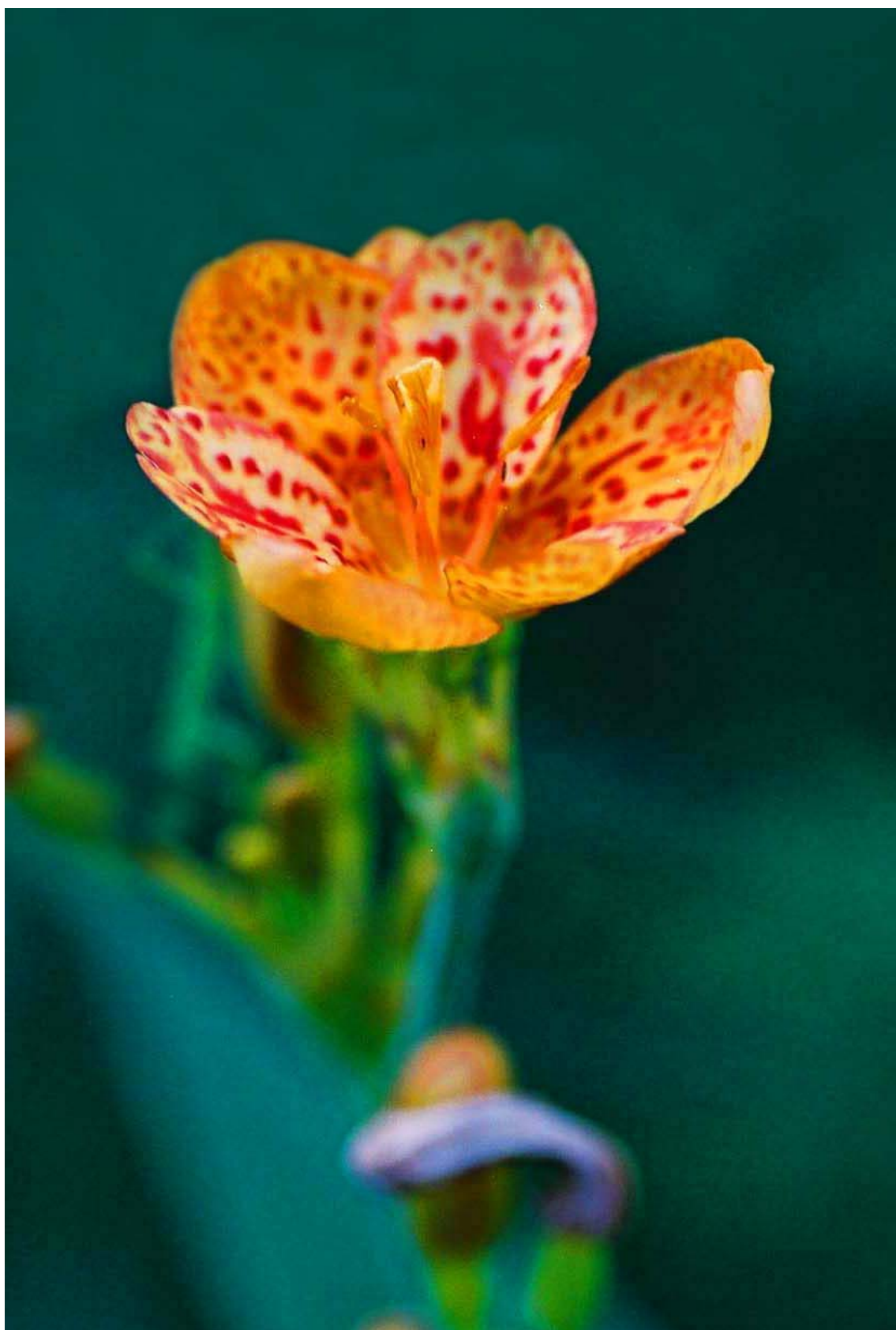


15) ヒオウギ=檜扇

ヒオウギはアヤメ科の多年草で、本州中部以西の海岸付近や原野に自生し、花が美しいために観賞用として庭に植えられることも多い。西日本のほか世界では原産地である中国大陸に広く分布する。一属一種の植物で、このタイプは比較的珍しく、樹木ではイチョウやメタセコイア、ハンカチの木などがある。また草本類では本種の他、シラネアオイ(01-02-09 シラネアオイの項参照)、次項で取り上げるキンポウゲ科レンゲショウマ属のレンゲショウマ、ユキノシタ科キレンゲショウマ属のキレンゲショウマなどがある。レンゲショウマ、キレンゲショウマは後述するとして、後者は、宮尾登美子氏の小説『天涯の花』で紹介され、にわかには脚光を浴びるようになった種である。東南アジアの特産種で、日本では九州、四国の高山帯の限られたエリアに自生するのみで、環境省の絶滅危惧種に指定されている。

さてヒオウギは草丈が50~100cmほどになり、葉は偏平な剣状で左右2列に互生する。8~9月ごろ花径が5~6cm、黄橙色地に赤い斑点のある美しい6弁花をつける。果実は広卵状楕円形で中には黒い種子が入っている。和名の由来は葉の並び方が細長く薄く、ヒノキの板で作った扇を思わせるところから名付けられた。別称として種子が黒いためカラスオウギとかカラスパキ、お彼岸の頃に咲くためにヒガンバナ、ダルマクサなどともいわれている。学名は『*Belamcanda chinensis*』で、属名はインドのマラバール地方の地名で、種小辞は中国のという意味である。イギリスでの呼称は『blackberry lily』、中国では『射干』である(02-04-15 シャガの項参照)。漢方では根茎を乾燥させたものを『射干』(シャカン)と称して、扁桃腺や去痰などの治療薬として用いられている。

日本の古い言葉に『ヌバタマ』という語があり、『ヌバ』は黒色を表わす最も古い語であるといわれている。時代が経つとこれは夜だとか黒だとか、夕べ、髪、妹、さらには夢などにかかる枕詞となった。漢字では『烏玉』と記す他、『烏珠』、『烏羽玉』、『野羽玉』などとも記されている。しかし本来は『射干』または『射干玉』と記して、『ヌバタマ』と読み、これはヒオウギの黒い種子に由来するものであった。これは植物の名称が一つの言葉になった例と見ることができるわけで、そんな例は他にも結構ある。例えば『葦田鶴の』(03-05-15 アシの項参照)、『白妙の』(04-03-01 カジの項参照)、『茜さす』(06-03-04 アカネの項参照)などが同じ類で、どれも枕詞として和歌の中でしきりに用いられてきた。昔の人は大自然の中からこうした形容詞や新しい言語を見つけ出して、それを自らの国の言葉に取り込むことによって語彙を増やしてきたのだろう。こんなところにも人間と花の『縁』が感じられてくるのである。園芸品としてのヒオウギは、花色が赤色のベニヒオウギや黄色のキヒオウギなどの他、草丈の低いダルマヒオウギなどがある。どれも陽のよく当たる乾燥したところを好み、繁殖は株分けか実生である。



美しい花だが、庭の片隅でひっそりと咲いていることが多い(東京都小平市薬用植物園)。



ヒオウギの根茎は、漢方では『射干』と称して、扁桃腺や去痰などの治療薬として用いられる。万葉の大昔から人に寄り添ってきた花である(東京都小平市薬用植物園)。



『烏玉』『烏羽玉』『野羽玉』といわれたヒオウギの果実(さいたま市緑区)。

[目次に戻る](#)